

第2セッション(ランチョン・セッション) 12:20~13:10

【新型コロナ・ウイルスの感染拡大に直面して】 コーディネート 浦野正樹

このセッションでは、新型コロナ・ウイルスの感染拡大の現状を鑑み、社会学サイドの災害研究としてどう考え、何を今後検討すべきかなど、自由に意見交換ができればと思います。とくに社会学サイドでは、この感染拡大とそれに対するリスボン、それらが及ぼす社会的影響を視野に入れながら、何にフォーカスを当てて見ていくべきか? こうした社会の反応は何を意味するものか、潜在的な社会的背景(社会の脆弱性の議論に繋がるとは思います)とどう交叉するのかに焦点を当て、災害研究としてどう考え、何を今後検討すべきかなど自由に意見交換ができればと思います。

以下は、コーディネータとしての現状での問題意識を記しておきます。

I. 感染症拡大とその災害過程

都市の基盤整備を第一にしてきた防災対策と復興政策の手法の応用では、感染症対策としては、ほとんどの確な対策が打てない。その近似的な手法は、物理的な隔離、封じ込め、交通の遮断であるが、仮に短期的にはそれが可能で有効だとしても、中長期的にその状態が継続すると、社会システムの破綻や社会的信用の崩壊に繋がり、それが引き起こす社会的ダメージが甚大なものとなる。

災害発生から蔓延までの空間的広がりや時間的展開は、他の災害因を起因とする災害過程とは大分異なる(例えば、緊急避難的な対策と災害防御の事前対応が平行的に進み併存する。水際作戦で食い止める緊急対策と感染予防の防御的な対応とが併存して進むなど)。

とくに、発生の初期段階は、医療・看護・福祉の領域(及び高齢者・乳幼児のケアをサポートする社会的資源)を拡充しつつ、うまく稼働させていくための、さまざまな工夫と知恵を最大限いかすべき時期となる。教育時間はその大きな資源のひとつでもあるし、その領域をサポートする様々なボランティア活動団体も、そうした資源のひとつである。そのステージでの社会の目標を、感染症への対応に重点的に置き、そこに目を向けさせる試みは重要だが、同時にそうした感染症への対応に市民の意識を向け、対応の意味や動きを浸透させて支援しながら、有益な資源を十分に活用する方途を探っていく必要があった。感染経路から比較的離れ、まだ余裕の持てそうなエリア(地域、社会領域等)では、その教育と予防対応実践の浸透に資源を活用する方法がもっとあったはずである。そうした社会の知恵や熟慮を引き出す可能性を、パターンリスティックな方法で強引に閉ざしてしまう。そうした政治手法こそが、致命的な欠陥である。

感染力が幾何級数的に増えるか、それとも漸増的な増加で収まるかの瀬戸際だといった局面の評価は、確かにその2週間で医薬の世界が飛躍的に対応策を編み出していけるのであればともかく(もし、そうした認識であれば、それまでの2ヶ月である程度までその目星がついているはずだし、またそれを支える仕組みの準備もしてきているはずなので、そのプ

ロセスと努力の痕をきちんと説明しターゲットを絞った政策を説明すべきだった)、そうでなければいつ果てるとも知れない事象のはじまりを宣告しているようなものであった。

恐らく感染症の専門家が、2週間がひとつの目途といったのは、暫定的にそのくらいの推移でウィルスの威力と拡散抑止力の力関係が見極められるだろうという感触であったと推測される。一方で、社会活動を完全に止めていけば、その間ウィルスは潜伏しているだけで、その後社会活動が一定程度再開すれば、それに応じた繁殖と感染が再開される。そうであれば、この期間は、むしろ、長期に亘りうる感染拡大に備える社会力を徹底的に蓄え鍛えるべき時期であり、その期間でやれること(やるべきこと)をもっと各セクションで合議したうえで対応していかなければいけない時期であった。

ムードを変えるきっかけは政治家の仕事だろうが、それはとくに市民が備えるべき力を引き出す支援を徹底的にやり喚起することであったはずで、社会をフリーズさせることではなかったはずである。その後現実化することになったが、社会の仕組みをストップさせる方向に進めば、その影響は多方面に一気に拡大・拡散し、予測しがたいほどのインパクトを及ぼしていくのは目にみえている。

何より徹底的に感染症対策を浸透させつつ、体調管理と健康維持増進に力を注ぐことが、感染症を軽微で終わらせるには必要であり、まだ余裕の持てそうな地域では、重要なポイントになる。そのうえで、危険度リスクの高い層には、福祉健康サービスを受け続けられるようにする対策を強化すべきである。とくに、危険度リスクの高い層に対しては、それを重篤化させないための生活指導とケアが重要になりつつある局面とみた方が良いのではないか? 感染予防は、あくまでもその重篤化を避ける方策の一つの系であり、市民が感染症に備える力をもっと引き出せるようにするための<関係性>を断絶させることではない。

2. 水際作戦の段階でやっておくべきこと(感染の特徴と重篤化へのプロセスの推論)

新型コロナ・ウィルスによる肺炎は、ある意味で社会的実験になる。ウィルスによる災害の場合、水際作戦は初発段階の暫定処置であって、次に来るステージ、即ち国内での感染経路が明確には辿れなくなり、いつともなしに蔓延していく状態に移行するまでの one step に過ぎない。初発段階で幸運にも収束するかどうかは、水際作戦自体の成否によるというよりも、病因の性格や社会的環境の状態といった要因の方が強いのかも知れない。

従って、水際作戦で対応している時間に、次のステージでの対応方法を徹底的に探って練り、社会的対応策とその準備を進め、根本的な治療方法の開発などに注力することが求められていたのである。ポイントは、ウィルスの感染の特徴と感染後の潜伏期間・病状の変化、症状を緩和する手法、重篤化する患者の特徴と対処方法、効果の見える薬とワクチン・処方等の開発になる。感染経路とクラスターの解明は、感染経路と方法を見抜く上で重要であり、クルーズ船のなかで起こっていることを、克明に記録し、様々な try and error を組み合わせ得られる知見を分析しながら、何がどのようなプロセスで起こるのか、感染はどのような条件でどのようなかたちで起こっていくのかを把握し、それを踏まえた封じこめをすべ

きであった。クルーズ船は、いわば小さな社会的空間での社会的実験が唯一おこなえる場であり、その知見や試行錯誤の結果をどう汲み取って生かしていけるかの重要な局面であった。その後の施策は、その重要な（重要であるはずの）知見を生かしたものにすることでより説得力のある、効果的なものになりえたはずであった。

①水際作戦と感染の封じ込め

②感染の封じ込めに失敗することを見越した次のステップの確立

3. 水際作戦から次のステージへの移行プロセス

2020/3/1 メモから。「未知の世界に無理矢理突入！ 少なくとも2週間経済活動を止める。しかし感染者の検査が進めば、感染者が増加することは目に見えている。その時にどのような対応がとれるのか？4/1から大量の移動が起こる。それまで1ヶ月での世論の推移を見ることにしたのだ！こうなったら経済をフリーズさせても仕方がないねと世論が思うかどうか？確かにライブやコンサート、舞台公演等では、理解のない若者が集中して羽目を外すことがあるので、やめた方が良いかも知れない！倶楽部の合宿等も同様。」

「だが、安部首相が、これだけの危機意識を急遽持ち、全国一律での小中学校の休校処置を要請するのであれば、クルーズ船のなかで起こっていることをもっと克明に様々な try and error を組み合わせた知見を分析しながら、何が起こっていくのか、感染経路はどのような条件でどのようなものになるかを把握して、それを踏まえた封じこめの方法を併せて説明したうえで、国民を説得すべき。これは、まさに法案を通すために私物化した行為だ！」

恐怖心から恐れ、理性的な判断力が麻痺して overreaction が発生し、それが更なる overreaction を加速させ、結果的に直近の目に見える形での社会的な不利益となって顕在化していくプロセスが進行しつつある。

一旦ステージが変わると、一気に全く異なる状況が出現する。その引き金を引くのは何か、誰か、引き金を引いたあとの状況把握や対応をどこまで事前に検討しておけるか、極めて難しい運用が求められる。

新型感染症拡大に対する唯一の処方箋が、一人一人を物理的に隔離し閉鎖することであり、移動を止め接触する機会を極力減らすことしか無いと判断し、政治的に戒厳令を敷いてまでそれを実施しようとするとき、実にリアルな社会事象として心理不安と経済的な不安増幅のメンタリティが生まれる。権力を握るものは、往々にして自分が思い描く決断をして、その思考回路を示さずに正当化しようとする誘惑が生まれる。政治的な土壌が既にそうした指向性を持っている社会では、それが唯一無二だと錯覚した判断が下され、それが検証不能にされていくことが起こりやすい。熟議が疎んじられ独断的な判断が称賛されるようなセンチメントが醸成されると、それは政治の世界を新たなステージへと引きずり込んでいく。

そうしたステージにおいて、閉鎖的で限定されたコミュニケーション空間のなかで、新しい施策やアイデアが考案されると、選択肢が少なく時間的な制約が大きければ大きいほ

ど、ふれ幅の大きい施策が採用されることになりかねない。その採用は更なる隘路に引きずり込んでいく危険性が高い。

一方で、個人化(=降りかかってきた課題は個人的な責任で解決手段を考察するしかなく、<社会なるもの>には多くの期待を寄せることはできないと考える指向性)が、強まると、上記の動きに対する抵抗力は徐々に弱まっていく。

政治をめぐる一連の動きは、不安を一気に増幅させる装置になった。しかも、それ以外の手を打つことができないという緊迫した認識とセットにして。それは、トランプの緊急事態宣言を通じて全米に広がり、感染が広がるヨーロッパも並行して次々と歩調を合わせる。この動きは、他の選択肢をもはや許さない。それを受け入れ誘導していく政治的土壌は、既にここ十数年の政治の動きのなかで醸成されてきたものでもあった。移民の排斥運動の高まりや国境に壁を作る偶像と親和性のある事象として、この政治的動きは実質的に機能していく。

感染の広がりに関しては、政治が無策であることを見破られ、その後はその対策の事後処置に追われ、さらに強い手段が国を超えて競われるようになる。すべての接触が危険を孕み、それを避けるには個々が隔離し、サバイバルするしかないというモードに変わりつつある。社会的な信頼や関係構築は胡散霧消しかねない。

金融不安→信用の崩壊→取引相手を信頼することが出来ない→実体経済への影響

実際に失業状態に陥りつつある産業セクターに加え、経済全体の動きが、既にこの悪循環が進行しつつある局面に入っている。実際には、社会システム自体の崩壊を招く危うい状況になってきているのではないか？]

(参考)

社会における危険の認知

(かなり長い間、認知の評価が揺れながら推移する時期)

→一方で疫学的なリスクの評価

(→それによって引き起こされる医学衛生学上の課題と脆弱性の炙り出し)

(→それに向けた社会的な対策や採るべき施策)

(→それぞれに関する社会的影響の精緻な比較考量)

→他方で、社会的な政策判断と決定プロセス

(→それに対する社会的な評価と影響)

(→市場全体の評価)